

硫黄島問題について

○「最後のお一人まで故郷にお還りいただく」
昭和27年より始まった遺骨収集事業は平成31年2月までに134回行われている。収集したご遺骨は10,454柱であり、未だ11,446柱(52.3%)が島で眠られたままになっている。
遺骨収集回数や人数の拡大が望まれるが、未だに水や食糧自給ができず、島での受け入れ体制の充実が課題である。
硫黄島協会や遺族会をはじめ関係者と政府により粘り強い事業の継続を行っていく。

○ 滑走路下の収集が悲願
最大の懸案は米軍占領以来一度も行われていない飛行場滑走路下の遺骨収集である。電波調査などIT技術も導入して空洞調査や遺骨確認を行い、新滑走路の建設後に、現滑走路下の遺骨収集作業を行わなければならない。予算と実施主体の確定等、政府全体の取り組みが必要であり、実施に向け強く働きかけていく。

○ 渡島手段の確保
火山島である硫黄島は未だに隆起を続けており、昔も今も港を作ることができない。大型船が着岸不可能のため、海が荒れると上陸できず引き返すこともある。自衛隊基地の飛行場は民間機の使用が許可されず航空自衛隊の協力により輸送機が年数回運航できるのみである。
平成18年より日米合同慰霊祭開催時、23年から厚労省主催の慰霊巡拝(年2~3回)に民間チャーター機を使用するようになったが、将来の定期便の就航を求めている。

○「慰霊と平和を考える」島へ
遺骨収集事業が終了した後は、この地で犠牲になった方をはじめ、全ての戦没者を慰霊し、戦争の悲惨さを伝える場所にしてはどうか？
第二次世界大戦最大の激戦地と言われる硫黄島を「二度と戦争を起こさない誓いの島」「平和を祈る島」として護っていきたいと考えている。

地下壕・トーチカと戦没者遺骨

旧日本軍による持久作戦が行われた島内には、総計18kmに及ぶとされる地下壕と、1000基近くのトーチカが埋もれています
特に、壕内は地熱のため60℃以上もの高温となっており、有毒ガスなどの危険もあります(平成20年にも死亡事故発生)
また、島内各所には未発見の壕口(縦穴)も多数存在しています



地下壕

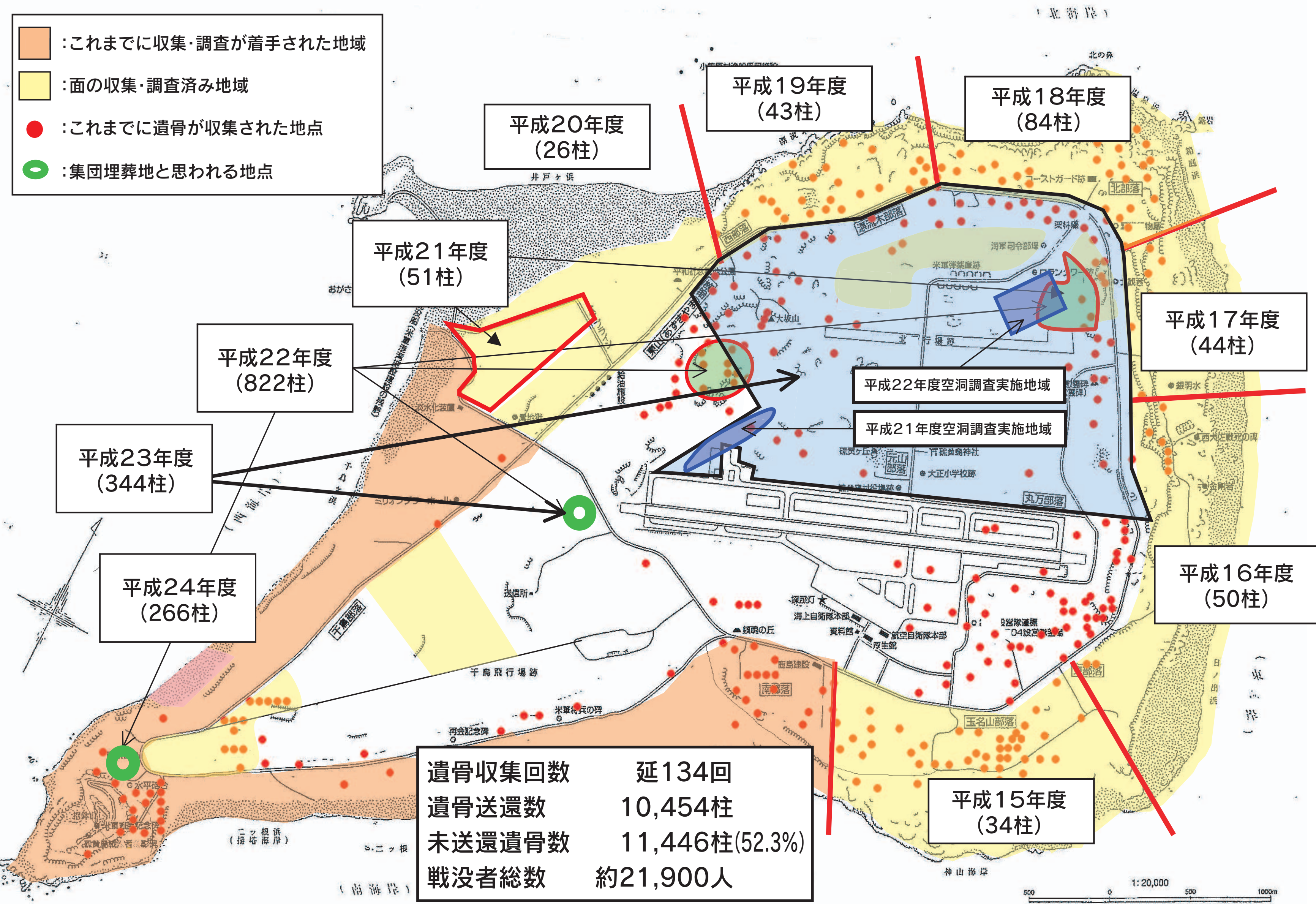


トーチカ



壕口(縦穴)

硫黄島における遺骨収集等の現状



○第一回の遺骨収集は昭和27年(91柱)に行ったが、以降、昭和43年の小笠原返還まで出来ず。昭和43年(270柱)、44年(2837柱)、45年(800柱)、以降は年を追うごとに減少。
○これまで送還したご遺骨のうち、遺留品等により氏名が特定できたのは100名に満たない。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
遺骨収集数	166	42	23	17	17	42

我が国の遺骨収集等の現状(全体)

先の対戦における戦没者は概数で約310万人。軍人軍属が外地で210万人、内地で20万人。一般邦人が外地で30万人、空襲など戦災で50万人。

海外戦没者概数	約240万人	遺骨送還概数	約127万柱(52.9%)
未送還遺骨概数	約113万柱(47.1%)	うち海没遺骨	約30万柱
送還すべき遺骨	約60万柱		
相手国事情で送還困難な遺骨	約23万柱		
・中国東北部(未だ遺骨収集許可されず、外交ルートで交渉中) ・モンゴルは平成6年に許可、11年までに概ね終了 ・北朝鮮(未交渉) ・ウズベキスタン(宗教上の理由で収集できず)			